

いつもの散歩コースは、今、虫たちの
大合唱に包まれている。

四月末から五月にかけて行われた田植
え。田にはられた水面に、なよなよとし
た、か細い苗が風にそよいでいた。六月、
七月そして八月と順調に育つのを喜ぶの
は農家ばかりではない。米不足であのま
ずいタイ米と抱き合わせの出来事を二度
と経験したくないからだ。

今年、稲作をめぐって笑えない珍事件
がおきた。それは、春先、農協から仕入
れた苗が酒米（酒を造るための米）の苗
だったというのだ。私たちが口にする、
うるち米の苗と間違っ配送したらしい。
そうとも知らず、育苗から、手間ひまか
けて一所懸命に育ててきたであろう農家
の姿が目に浮かぶ。この話を知ったとき、
私は「醜いアヒルの子」の逆バージョン
農家編だと思った。醜いアヒルの子は成
長して白鳥になったのだからハッピーエ
ンドだが、こちらは全て刈り取り処分し
たそうである。農協の単純ミスだった。
散歩コース周辺の稲田は、どうやら珍事

件とは無縁のようで、今回の地震や風水
害の影響も無さそうである。

暑い夏を過ぎ九月に入ると、稲刈り
作業が目につくようになった。四ヶ月の
時を経て、あつという間の稲刈りシーズ
ンの到来だ。すでに刈り取られた稲株の
並び方から、あらためて、整頓された田
植えだったことが分かる。この稲株、こ
れまで当たり前のこととして何気なく見
過ごしていたことだが、稲は植えたとき
は一本の苗である。それが成長するにつ
れ本数を増やしていく。数えてみると二
十本余になつていく。この増殖した稲株
は、それぞれに研究がつき、無駄な株分け
が無いように研究されてきたらしい。蓄
積された日本の稲作技術のたまものであ
る。
「春夏秋冬（しゅんかしゅうとう）」、慣
れ親しんできた読み方である。季節を表
わすことばが春から始まることに落ちつ
いたのは、四季持つ国の、農耕民族なら
ではの発想なのかも知れない。私は冬生
まれだから個人的に言えば、「冬春夏秋
（とうしゅんかしゅう）」と冬から秋とな
り、四季が実りの秋で締めくくられる。

これだと人生に希望が持てるような気がする。
黄金色に埋め尽くされる稲田は、秋色
そのものである。やがて、刈り取られさ
っぱりとした姿を見せる広大な稲田と共
に、秋を代表する貴重な被写体になる。
その姿はまさに実りの秋を象徴している。
つ　振り向けば、国上山と弥彦山の間
　　赤な夕日が足早に落ちていく。
　　田んぼ道　沈む夕陽に　背を向けて
虫の音聞きつ　家路をたどる